

## 審査の結果の要旨

氏名 温 静

本論文は、「組物から見た中国宋・遼・金代建築の研究」と題されたもので、中国の宋、遼、金代の建築を対象として、そこに用いられた組物の発達を中心に論じたものである。組物は深い軒を支える必須の構造材であり、かつ最も装飾的な要素でもある。東アジアの建築に特有の部材であって、木造建築研究の大きなテーマの一つである。宋代を中心とする中国建築史研究においては、従来『营造法式』の研究が中心であって、それに従って研究が進められてきたが、本論文では、中国山西省に多数残る遼、金代の建築を新たに加え、宋・遼・金代の建築の特徴を、特に組物を中心として論じた。

本論文は、全3部であり、序論、10の章、結論で構成される。

序論では、研究の背景と目的、研究対象、研究方法、用語について述べる。

第一部は、「組物形式」（第1～2章）であって、単純な組物から複雑な組物まで、原理的な発展過程を述べたあと、特殊な斜材尾垂木について検討している。尾垂木は日中の組物の双方に用いられていたが、中国では比較的早く構造材であることを停止し、それゆえ統一的な側回り組物が成立することになった。日本の禅宗様建築は、小屋組が成立したこともあり、中国に見られる多様な段階での形式が導入され、維持されていた、と指摘した。

第二部は、「架構形式の変化と組物の発展」（第3～6章）である。前半では、日中の建築における架構形式の変化によって、組物の持つ役割が変化したことを示し、次いで中国建築における高級な組物の発展の経過を述べている。その結果、『营造法式』に見られるような統一的な組物の成立過程を明らかにした。後半では、中国建築における中備組物の発展について検討した。中備組物が、手先の無いものから、次第に柱上組物と同じ形式にまで発展していった経過を精密に体系化した。最後に実例として仏宮寺釈迦塔（応県木塔）の多様な組物の形式を分析し、特に斜栱の角度の決定法も明らかにした。

第三部は、「中国北方建築の組物多様化現象」（第7～9章）であって、遼、金代の建築に特徴的に見られる組物が多様化した現象を検討し、統一的な組物外観をもつ『营造法式』とは正反対の方向性をもつことを明らかにした。多様化の諸要素は、木鼻、扇形栱、斜栱、尾垂木などであって、それぞれの配置が、建築の正面性、中心性、さらに出入り口の強調などを意味することを明らかにした。実例として、晋祠聖母殿、崇福寺弥陀殿・観音殿を取り上げて、その特徴的な組物の配置を分析し、意匠的な意味の理論化を検討した。

本論文の特徴は、従来、個別的に研究されてきた宋、遼、金代の建築を対象に、組物を網羅的に取り上げて通覧し、発達史として体系づけたことにある。また、宋代（『营造法式』）ではすべて同一の形式の組物を配置するのに対し、遼、金代建築では、多様な組物を発達させ、それを適宜配置するが、その多様な形式と配置法を理論化して捉えた点にある。

本論文は、中国国内における従来の組物研究を大きく凌駕したと同時に、韓国、日本の組物を含む、東アジア建築様式史研究のための、広い基盤を構築したと言えよう。

よって、本論文は博士（工学）の博士学位請求論文として合格と認められる。